

大和田建樹君著

評 謠 曲 釋

全部九冊 大判和裝上製 正價各四十錢

故大和田建樹先生は斯道の泰斗として其造詣最も深く、江湖渴仰して其の高風を慕ふ、本書全部九冊、觀世流の謠曲約二百五十番を蒐め、各註釋を加へ、總假名を附し、全部を通じて曲名を伊呂波順に並列し、終に語釋の索引を附す、用意周匝、評釋精透、洵に斯界の珍本たり、諷謠の道に遊ぶ人の好伴侶たるは論なく、文人雅客の一本を藏すべき大寶典なり。

東京 博文館 本町

高尚な

る 娛樂

は 謠 曲

文學博士 佐賀芳

文學博士 木賀芳 佐賀芳 網賀芳 網賀芳 網賀芳

訂校 生先 網賀芳

校 註

謠 曲 叢 書

全 部 三 冊

- 第一卷 八百三十頁
- 第二卷 七百六十頁
- 第三卷 六百八十頁

本叢書第一卷第二卷に收めたるものは、觀世流の内外二百番を根柢とし、貞享元祿版の番外二百番其他各流に互りての出入を補へるを以て、總計五百數十番に達す。

第三卷には、和漢朗詠集をはじめ、宴曲諸集を彙集して、野曲の全觀を得せしめむとす。いづれも新に標註を施したれば、江湖初見の轉本なりとす。

嘘をつく日

水野 仙子

患者として此病院内で一番の古顔となつた代りに、私は思ひの外だん／＼快くなつて行つた。

もう春も近づいた。青い澄んだ空は、それをまじ／＼と眺めてゐる私に眩しさを教へる。さうしてついと其窓を掠めて行く何鳥かの羽裏がちらりと光る。私はむく／＼と床をぬけ出して、其ぢ／＼むさい姿を日向に曝し、人並みに、否病めるが故に更に多くの日光を浴びようと端近くにちり出る。

或は又新しい心の味はひを探しに、ぶらり／＼と長い廊下を傳つて行く。たとへば、長い間寝ながら眺めてゐた向ふ側の病室の前を歩いて見る事、又は階下に降りて見る樂しみ、幾月かの間憧れてゐた土を踏んでみる事の愉快、しかしそれらの事が毎日滞りなく行はれなければこそ、其期待の樂しみは續く——蝸牛は木の葉の搖ぎにでも其觸角を殻の中に閉ぢ込めなければならぬ。かくして私も或日は部屋を閉ぢて、靜かに其障害の去るのを待ちつゝ横はるのである。それは大抵僅かではあるが、熱とそれから胸部の痛みとのためであつた。

けれども月日は私の元氣に後楯をした。診察室の前の大鏡に映る、引つ詰め銀杏の青白い顔は、日に／＼燃らかづ／＼色を直して行つた。長い間には病院の内も外も私の散歩に馴れて、新しい感味が單純な頭を喜ばす事も少くなつた。それでも猶たつた一人の無聊さに——或時はそれが無上に安らかで嬉しかつたけれど——歩き馴れた廊下をぶらり／＼とあてもなく私は病室を出掛けて行く。

かうした日の續きに、私がふと四月一日が来るのに氣がついて喜んだのは、其十日ばかりも前の事であつた。四月一日、それは藥を飲む事と、喰べる事と、眠ることと、それから遊ぶ事より外には能のない人間にとつては、まことにお誂へむきの新規な慰みであつた。All fools day—一年の中にたゞ此日だけ嘘が許される程、常に人々の心に正直が保たれてあるとも思へないけれど、それは兎も角、親しい人達を大つびらに瞞したり擔いだりする事が出来るのは面白い事に違ひない。この幾年かの私の辛慘な生活に於ては、なか／＼思ひ出せもしなかつた、又思ひ出してもそれを實行する程の興味を伴はなかつた「四月馬鹿」が、漸く死の虎口を遁れて來た恢復期の門のあたりで、人世の嘘を享樂すべく私を誘つたのであつた。

私はうっかりして其日を忘れないやうに、またどんな方法で皆を擔いでやらうかなどと考へながら四月を待つた。もう彼れ是れ二百日近くも病院で暮してゐるので、院長を初め内科の醫員や看護婦達とは随分親しみが出來てゐた。

「先生——四月一日がもう直き參りますから油断してらつしやらないやうに……」

或日私は最後の診察室の寢臺を下りながら、笑ひ／＼院長に向つて言つた。

「さう、四月も／＼直きですね、全く愚圖々々してられないなあ！」と若い院長は立ち上りながら、曇り硝子の外の明るい日ざしに眼をやつた。

「瀬川さんもう／＼病院で花見をするやうになりましたね、もう二週間もしたら立派に咲きますぜこの模様ぢや。……え／＼／＼瞞したつて構ひませんとも！」

扉を排して院長は出て行つた。二人の醫員も亦晝の休息に醫局へと去つたあと、其處らの掃除を初める看護婦の津野さんと大越さんを捉まへて、私は猶も四月一日の話をする。大越さんは少しもそんな事を知らなかつたけれど、東京苦しみの津野さんは、

「さう／＼、其日はどんなに嘘をついてもいゝのですつてね、無禮講なんですつてね。」と言つてゐた。遙かに那須山の煙りを靡かせて、風は少しづつ／＼逕巡つてゐたけれど、よく晴れた日が二三日續いた。さうして四月は遂に來た。地には青い草が萌えてゐる。緋鯉の脊が泛ぶ庭の池の飛石に、鶉鴒が下りて來て長い尾を水に叩いてゐる。さうして紺青の空！この麗はしい天日の下に、一體何が世には起つてゐるのか？

私は其朝、此日頃の期待にも似ず、ぼんやりと寢床の中に一日の午前を費しかけた。何故かしら頭

をそつとして置きたくて、一寸の間體を動かすのが厭だつた。暫くすると、大抵十一時半に鳴る近き寺の鐘が、一つ二つと餘韻を追つて撞き出された。

それから私は間もなく羽織をひつかけて病室を出掛けて行つた。いよく今日はみんなを擔いでやる……さう思つて私は微笑を隠した。廊下の中途で、ふと庭の方に突き出されてある研究室の方に眼をやると、白い服の人がちら／＼してるのが硝子越しに見えた。よく見るとそれは大越さんだつたので、私は先づ其の方へと足を向けた。

私が研究室に入つて行つた時に、大越さんは小聲に唱歌をうたひながら、カチ／＼と試験管を觸れ合せて、頻りに尿の検査をやつてゐた。

「大越さん！」

「は？ お、吃驚した、あら嫌だ瀬川さん！ いらつしやい。」

「貴女お一人？」

「えい、もう厭になつてゐたところ。」

私は有合せた椅子の脊にもたれて、ちつと大越さんの容子を窺つた。大丈夫もう今日の事は忘れてゐる！

「大越さん！」

「えい？」

「……貴女今日××の新聞見て？」と、私はよくくだらぬ投書などの載つてる、地方新聞の名を言つた。

「いゝえ」と不思議さうに大越さんは私の顔を見る。

「何故？」

其處で私は思ひ切つて出鱈目を始める。

「出てるのね。」

「何が？」

「貴女の事がよ………」

「えい？」

片つ方の手には黄色い液體を滴した試験管を持ち、片つ方の手のピンセットで試験紙を挟んだまゝ、大越さんは全く吃驚して私の顔を見瞶める、今年十九の處女らしい血色のいゝ顔は、見る／＼眞赤になつて、眼の中までが燃え出しさうだつた。

「嘘でせう瀬川さん。」と何かを哀願するやうな調子であつた。

「いゝえ眞實ですとも！」

「まあ厭だ！ まあ怖い！ どんな事が出てくるんでせう？」
「いゝえね、一寸投書欄のところ：……大體は褒めてあるんだけど、一寸冷かしたやうなところもあるの。」

驚いた事には、今の今あんなにさつと赤くなつた顔が、私が一寸眼を伏せてゐた間に、今は眞青に變つてゐるのであつた。

それを見ると私は餘りに其處女心を亂したのが氣の毒にもなつて、

「何もそんなに心配する程のものぢやないわ、どうせいたづらですもの……まあ今日の××新聞を見て御覽なさいよ、見りやわかるわ！」

さう言つて私は、今は仕事も何も手につかなくなつて、宿直室に新聞を見に行かうとする大越さんと廊下を左右に分れた。

「瀬川さん、××新聞ですな？」と二三問行つてから、念を押すやうに大越さんは振返つて言つた。
「え、さう、三面の下の方。」と私は猶も出鱈目に答へる。

大越さんの恐怖と心配に満ちた顔を思ひ泛べると、少し罪なやうな氣もしたけれど、またそれを笑ひに返す時の事を思ふと、私は更に元氣づいて、自然と歪んで來る口許を袖で押へながら、勢ひ込んではたたくと診察室の方へ驅けて行つた。

丁度正午を少し過ぎた時分で、午前中の外來の患者は大抵歸つてしまつてゐた。薬局の前にはちらはらと藥を待つてゐる人が見えたけれど、廣い廊下は人影が稀になつて、そちこちの扉から出て來る白上着の醫員や看護婦のみが、何か忙しげに何處へか消えて行く。

何時も今時分は内科も隙なのを知つてゐるので、忙しい院長の氣を職務外の事に向けさせるのに、丁度いゝ折だと私は密かに思つた。私が扉をあける、すると大きな診察机に肘をついて、或患者の溫度表を見ながら、一人の醫員に何事かを獨逸語混りに話してゐる院長が、ちらと此方を振り返る。さうして其處に「キュービーのマガザ」が（私があの滑稽者のキュービーを部屋に飾つて置く所から、院長はいつも戯むれに私をかう呼んだ）何事かを押し湛へたやうな顔をして入つて來るのを認めるであらう！

私は大越さんを擔ぐのに旨く成功したので、すつかり調子に乗つてしまつてゐた。さうして興味に燃えながら、微笑を顔中に漂はせて、勢ひよく扉の把手に手をかけてそれを引いた。

其瞬間——私の體が入口に現はれ、私の眼が室の内部を見た時に、私は思はず其處につつ立つたままになつてしまつた。今まで何かしらいつばいに張りつめてゐた氣が、いきなり其處で譯もなく抜かれてしまつたのだつた。

診察室の中には、私が待ち設けたやうに院長の姿は見えなかつた。又獨逸語の發音もなかつた。た

だ不思議に緊張した無言の空気があつた。……其氣分が不意に私の面を打つたので、自分の眼で見
た事を私が了解するまでには餘程の時間が取れた。

可なり廣く取つてある室の向ふの窓の下に、一つの寢臺がいつも横へられてあつた。今其寢臺の周
圍に、一人の醫員と、二人の看護婦と、それから印袴纏を着た長裾の男とが集つてゐた。看護婦のう
ちの一人は津野さんだつたけれど、私を振向いても、いつものやうな笑顔を見せずに、妙に氣のつま
つたやうな眞面目な顔をしてゐた。そして他の人達も、扉の音に一寸振向きはしたけれど、直ぐに寢
臺の上の或るもの、上に腫を集めて行つた。

看護婦の腕の下から寢臺の上に見えるものは、何だか小さな肉塊やうのもので、それを醫員が頻り
に揉んだり揺つたりしてゐるのであつた。それも、或る甲斐のないものを甲斐あらせようとしてゐる
やうな、一生懸命な調子であつた。私はまだ曾て、人工呼吸法といふものを見たことがなかつたけれ
ど、今ふとそれが頭に泛んだ。

私は一寸、此儘引返さうか引返すまいかと戸口で迷つた。けれども兎も角後を音もなく閉めて、足
音を憚りながら一足二足そちらに近づいて行つた。と其途端に、

「とても駄目ですな！」と醫員は投げ出すやうに言つて、片膝を乗りかけてゐた寢臺から離れた。
私はびくりとして立ち止つた。其時二人の看護婦も無意識に手を放したので、其腕の影に隠れてゐ

た赤兒の首がぐたりと傾いた。

「えつ！ 駄目ですか？」

醫員の言葉と殆ど同時位にかう叫んだ聲は、再び私の足をびくりとさせた。

それは、今の今まで信じてゐたまのを撈ぎ取られて行く驚愕の極みであつた。彼は——印袴纏の男
は、顔色を失くして、爲すべき事を知らぬものやうに、手をもぢく——とさせてこくりと唾を呑んだ。

「どうも、どうしても脈が出ないんですものね。」

それでも猶もう一度醫員は手を出して、青褪めた赤兒の心臓部のあたりを揉み初めた。其運動に連
れて、赤兒の首はぐなりぐなりと揺れて動くのを、看護婦がそつと手で押へた。

それは併し一二分間、僅かな期待をつないだに過ぎなかつた。

「駄目だ！ お氣の毒だがどうも仕様がありませんね。」ときつぱり言つた、今度は醫員も眞實に寢臺
の傍を離れた。

「なんとも仕様がないでせうか？」

「え、何とも仕様がありませんね、脈があるもんなら注射つてこともありますけれど、連れて來た時
に既にもう脈がなかつたんですからね……たゞまだ温かいだけです。」

さう言つて醫員はさつさと手を洗ひに立つて行つた。

一人の看護婦は其後に睨いて行つた。さうして醫員がタオルで手を拭つてるところへ、昇永水に浸した脱脂綿を持つて來た、

「先生一寸。」と言ひながら、其上着の袖口を摘んだ。

「何だい？ 大便かい？ ひやア！」

醫員は苦笑して一寸寢臺の方に眼をやつた。

それまで男はさも途方に暮れたやうに同じ所に突つ立つてゐたが、

「困つた！」と呟くと、漸く諦めたやうに死骸の側に寄つて、無器用な手付きではだけた襦袢などを始末にかゝつた。

「まだこんなに温かいんですが……。」と肌障つて見て、彼はやつぱり思ひ切り惡るさうに醫員の方を振返つた。

「温かくとも駄目です。」

醫員は再びきつぱり言つた。それでも餘りに取りつき場のないのに氣がついたやうに、やがて言葉をやめて、

「どうもお氣の毒な事をしましたね……貴方のお子さんですか？」

「いえ、私の妹の子なんです……。」

「とにかく所と名前とを聞いて置ませう。」

醫員は椅子に就いて、腕を伸してペンを取つた。

「名前は私の名でいゝんでせうか、又……。」

「いゝえ、其子供の名前です。」

「苗字は若林つていふんですが、ハテ名前はなんていふのかなあ……。」

男は困つたやうな顔をして頭を掻いた。

醫員は驚いたやうに顔をあげて、

「名前がわからないんですか？」

「はあ、何ていふんだか、私もつい忙しいもんですから、その自分の子供でねえもんだから、うつかりして聞きもしなかつたんで……。」

「それでは貴方の家の人ぢやないんですね。」

「いえ、私の家に居る事はあるんです。その唯みんな赤兒くつてばかり言つてるもんですからな、ついその……それに私は大工で、毎日仕事に出て行くもんですから……。」

「困つたなあをいつあ、だがまあ分らないもんなら仕方がない……女の子でしたね、幾つです？」

「舊正月生れだとか言ひやすから、さうしつと新の二月でござな。」

「するとまだ六十日ばかりにしかならないんですね……どうです、今朝まで眞實になんともなかつたんですか？」

「は、私が今朝仕事に出て行く時分までは、確かになんでもなかつたやうです。これや先づ、今年八つになる私の女の子がおぶつててこんな事になつちまつたんですが……どうも困つた事が出来つちまつた……これ一人つきり妹には子供が無いんだが……」

彼は如何にも静かさうに轉ばされてゐる赤兒を振返つて、同情を求めらるやうに人々の顔を見廻した。「實は何です。此子供の親父は今此地に居ねえんです、東京さ稼ぎに行つてゐるんで、妹はこの子供を連れて、一と月ばかり前に私を頼つて來たんです。今煙草工場さ働さに行つてやすがな、先刻晝休みに乳飲ませに連れてつて、歸つて來たばかりなさうですから……」

「ほう、其時まで何でもなかつたんですね。」

「はあ、いつも私のお母——この子供の祖母ですな、それが守してゐるんですが、その今年八つになる私の娘が、おぶいたがつて泣くもんだから、ちよつくら背負はせて出してやつたんだつていひやす。私もいきなり仕事場さ迎へに來られて、吃驚して飛んで歸つて、それから直ぐに此院さ連れて來たんでござがな……なんでも唄なんてうたつて錢貰つて歩く女の後にくつついて歩いてゐたのを、隣りの小母さんが見つけて知らしてくれたんだつていひやす、ぐたりとなつてゐたんですね其時にやあ。」

「其時胸があつたかどうかわからないだね。」

「直ぐにおろして氣付けなんて飲ませた時にや、息ふつかへしたつていふんでござが……」

「やうな氣がしたんぢやないのかね。とにかくもうかうなつては仕方がない。」

「醫員はベンを置いて、立ち上りざまズボンの隠しに両手を差し込んだ。」

「兎に角連れてつて歸つて呉れ給へ！ さうなつたものをいつまでも置いたつて仕様がなないんだから……」

「は。」

氣がついたやうに彼はぼくりと頭を一つ下げた。

「さあ飯にしよう！」

當事者以外四人の人々の胸に、多少づゝの引つかかりを作つてゐた情實をこゝに截然と打ち切つて、醫員は強い足取りで勢ひよく扉を排し去つた。

「いや、どうもお世話様になりやした！」と朴篤な挨拶を其背後に投げて、男は溜息をつきながら自分の兵兒帯を解きにかゝつた。さうして浮腫のあるやうな青ぶくれた赤兒の死骸を其肌を抱いた。

「こいつあ先づ、おつ母がまだなんにも知らねえでゐるんだんべの……」

看護婦は其よれの帯を拾ひ取つてやつた。彼は其れを腰に廻し、貧しい子供の着をもつて、

生ける子にするが如く其背を蔽うてやつた。

「いやお世話になりやした。」

再び看護婦達に挨拶を残して、彼は遂にすこくと診察室を出て行く——
今は私も最早こゝに何の用もなくなつたやうな気がした。

「可哀いさうにねえ！」

「私も、死んで行く人を取扱ふたんびに、つくづくこんな職業はいやになつちまふわ！」

こんな事を言ひ合つてゐる二人の聲を後に残して、私も亦打ち伏せられたやうな心持ちになつて廊下に出た。

すべてのものゝ結末は寂しい！ たとひそれが好い事であれ、凶い事であれ、最後には必ず溜息が伴はれるではないか？

私はふと、今の先自分が何の目的をもつて、又どのやうに心を樂しませて、此診察室の扉を開いたかを思ひ起した。それは人を擔ぐために、嘘をついたために、さうして其事によつて遊戯をする爲めにであつた。

ところが、私が數日前から計畫し、心密かに其遂行を樂んでゐた遊戯の興味は、風の前に置かれたものゝ匂ひほどの脆さもなく、何處かへ消え去つてしまつてゐた。今は其名残りを、心の衷の何處かに

に埋んでゐる羞耻の念を求めぬより外はなかつた。

たとひ一歳に足らぬ小さな赤兒であるからといつて、其死も亦些細なものであるとなす事は出来ぬ。其何物をも顧慮せず、何物にも煩ひされないうで、靜かに嚴かに行はれて行く人の死の絶對な靜肅さの前に、何といふ生きたるものゝ遊戯は哀れに無意味なものであつたらう！

四月一日、私は以後この日の遊びを永久に葬らう！ それは私にとつて最早無意義であり、無興味である。若しも今、彼の死兒を抱いて行く兄弟を呼びとめて、

「もし〜貴方！ 何もそんなに氣を落しなざるには及ばないぢやありませんか、それは嘘ですよ、笑戯ですよ、御覽なさい、赤んぼは貴方の懷の中で笑つてるぢやありませんか！ 貴方、今日は四月一日ですよ！」といふ事が出来ない限りに於ては！ (完)